

令和6年度 旧今治管内生徒指導夏季研修会 実施報告書

1 日 時 令和6年8月1日(木) 9:30~11:50

2 場 所 今治市中央公民館(大ホール)

3 研修内容

- ・ 映 画 「みんなの学校」2014年ドキュメンタリー
- ・ 出 演 大空小学校のみんな 製作：関西テレビ放送 配給：東風

(1) 映画について

大空小学校がめざすのは、「不登校ゼロ」。ここでは、特別支援教育の対象となる子ども、自分の気持ちをうまくコントロールできない子ども、みんな同じ教室で学びます。ふつうの公立小学校ですが、開校から6年間、児童と教職員だけでなく、保護者や地域の人もいっしょになって、誰もが通い続けることができる学校を作りあげてきました。

すぐに教室を飛び出してしまう子ども、つい友達に暴力をふるってしまう子ども、みんなで見守ります。あるとき、「あの子が行くなら大空には行きたくない」と噂される子が入学しました。「じゃあ、そんな子はどこへ行くの？ そんな子が安心して来られるのが地域の学校のはず」と木村泰子校長。やがて彼は、この学び舎で居場所を見つけ、春には卒業式を迎えます。いまでは、他の学校へ通えなくなった子が次々と大空小学校に転校してくるようになりました。

このとりくみは、支援が必要な児童のためだけのものではありません。経験の浅い先生をベテランの先生たちが見守る。子どもたちのどんな状態も、それぞれの個性だと捉える。そのことが、周りの子どもたちはもちろん、地域にとっても「自分とは違う隣人」が抱える問題を一人ひとり思いやる力を培っています。

映画は、日々生まれかわるように育っていく子どもたちの奇跡の瞬間、ともに歩む教職員や保護者たちの苦悩、戸惑い、よろこび……。そのすべてを絶妙な近さから、ありのままに映していきます。

そもそも学びとは何でしょう？ そして、あるべき公教育の姿とは？ 大空小学校には、そのヒントが溢れています。みなさんも、映画館で「学校参観」してみませんか？

【映画『みんなの学校』公式サイトより <https://minna-movie.jp/intro.php>】

(2) 質疑応答・感想

- 人は一人では生きていけないという言葉があるけれど、まさにその通りだと思った。支えてくれる周りの大人や友達がその子供を理解して受け入れていることが、大空小学校のすばらしいところだと思う。大空小学校の子供たちが、小学校だけでなく、その先も受け入れられる社会であってほしい。
- 子供たち同士での関わりの中で、表情や発する言葉、態度が段々と変化していったのが印象的だった。環境を整えることで、全ての子供が輝くことができる場を作ることが可能であると感じた。
- 「自分と他人には異なるところがあることを理解し、それを受け入れること」、「誰しも間違えることがあること」を生徒たちが自然に理解しながら学校生活を送っている様子に感銘を受けた。映画の中で「自分ならどうするだろう」と考えながら見ていた。
- 大空小学校の先生方が本気で子供たちと向き合っている姿、子供たちが泣いたり笑ったりしながら自分の気持ちに正直に向き合っている姿がとても印象に残った。木村校長先生が開校当初に思った「この子が居なかったら良い学校になるのに……。」という言葉、今の自分がそうである。とにかく、そんな自分を変えていきたいと強く感じた。
- 大空小学校の木村校長先生の「学校はみんなでつくる。」という言葉がとても印象に残った。そして、教職員一人一人が学級の子供だけでなく、学校全体の子供に対して真っすぐに向き合っている姿に心を打たれた。配慮を要する子供に対して、教職員だけでなく周囲の子供たちも思いやりをもった声掛けや行動が見られ、学校全体が非常に温かく感じた。
- 現在、特別支援学級の学級担任をしているが、個別に支援を行うことに重きを置いている自分に気が付いた。集団の中で、周囲の力を借りながら児童を育てていくことの大切さを感じた映画であった。「周囲に迷惑をかけないために」という思いを新たな視点で捉え、今後の指導に生かしていきたい。

(3) 今回の研修をどのようにして今後に生かしていきたいか

- 教職員がそれぞれの考えを理解して、何でも話せる職場づくりが必要だと感じた。カバーし合える人間関係づくりが、子供にも教職員にも必要である。
- 子供は変わらない、変わるのは周囲。その周囲とは、無限に広がる人間関係。それを変えられる教師に自尊感情がなければ指導に繋がらない。今できること、やれることを考えて視野を広げ、更に成長していきたいと感じた。今の気持ちを忘れないようにしたい。
- 木村校長先生の言葉「子供の一瞬一瞬は本物。それを繋げていくのは子供の可能性である。」子供の行動に何度も裏切られたり、ショックを受けたりすることの繰り返しであっても、最後の最後まで子供の可能性を信じられる大人でありたいと感じた。
- 木村校長先生の経験談の中で、「この子さえいなければ、もっと良い学校になるのに・・・。」という過去の思いを聞いて、私も学級担任をする中で同じようなことを考えてしまっていたときのことを思い出した。しかし、その考えからは良い学級も良い教育も生まれないということを改めて感じた。今、学校で関わっている子供たちのありのままの姿を受け止め、一番の理解者になろうとするところから始めてきたい。
- 配慮が必要な生徒に目が行きがちであるが、周囲の生徒をどれだけ育てていけるかが大切であることを再認識した時間だった。みんなで助け合って、「人にされたら嫌なことはしない。」という部分を学級経営に生かしていきたい。
- 実際に自分も学級担任をしている中で、配慮を要する児童への関わり方に難しさを感じている。今までは、「この子はこういう子だから」というレッテルを貼って接したり、自分主導の物差しでその子を判断してしまったりすることがあった。これからは、その子に真正面から向き合い、その子がその子らしく輝くことができるような環境を、一緒につくっていきたい。「全ての人が学び合う、みんなの学校」を目指して、日々精進していきたい。
- 授業や学級経営、部活動指導を通して「このクラスで良かった。」「このチームで良かった。」と心から思える集団を育てていきたい。子供との信頼関係、それが全てであると思う。

(4) 本研修会の様子



<写真1 本研修会の様子1>



<写真2 本研修会の様子2>



<写真3 本研修会の様子3>



<写真4 本研修会の様子4>